

市民協働型の幼児教育推進体制づくりー伝統染織による実践資源を活用してー

事業代表者 教育学部・教授・佐々木和也

構成員 教育学部・准教授・良香織 高根沢町環境課・課長・阿久津幽樹

NPO 法人ふるさと未来 Sou・理事・野村恵子 陽だまり保育園・理事長・木村厚志

1 事業の目的・意義

研究代表者は、これまでエコ・ハウスたかねざわとの連携で、伝統染織を取り入れた環境学習プログラムを開発し、定期的な学習会を開催することにより環境啓発活動を支援してきた。この資産をベースに、2008年度より、幅広い世代で伝統的な和綿の栽培を通して地域を活性化する活動を、老人介護施設の農地を利用して展開してきた。事業を通して、町の不登校児童・生徒の居場所フリースペースひよこの家、地域の保育園と連携体制を築き、家庭内で伝承されてきた和綿文化を地域モデルとして、地域創造に関わることのできる市民の育成に寄与し、当初の目的を達成してきた。この事業で築いた体制をベースに、13～15年度の期間中で、地域再生の拠点として幼児教育機関と連携し、地域で子どもを見守り、育てるという伝統的なスタイルの価値再生を目指して、藍染活動を通して実践研究を行ってきた。成果として、研究代表者が指導してきたふるさと未来 Sou の自主活動グループ「里山文化の会」が、陽だまり保育園（私立）・にじいろ保育園（公立）と連携して、里山環境で藍を栽培し、藍染活動を展開しながら地域の任意団体である桑窪花づくりの会との連携体制づくりができた。

以上のような成果を元に、本事業では伝統染織がもつ文化的価値を幼児教育に生かしていく担い手づくりに焦点を移し、幼児期の環境と関わる力を育てる自然保育について検討する研究会を立ち上げる。そこでのメンバーが中心となり、15年度までに実践してきた藍染活動を通じた環境教育効果を検証しつつ、幼児教育に関わる保育士ならびに保護者・地域が必要とされる資質と役割について発信する。

2 本年度の事業内容

(1) 幼児教育における藍染活動の検証【H28-30】

幼児期は小学校以降の教科的な学びではなく、領域的な学びであり、複合的な観点から子どもの育ちを支援し、「三つ子の魂百まで」といわれるように、感性発達を促す保育が必要である。本年度は、藍染活動に加えて、「〇歳からの草木染」を新たにテーマに加えて、それぞれの発達段階における染色活動の可能性について検討した。

(2) 質的評価手法に関する試案【H29-30】

各発達段階の染色活動におけるエピソード記録を現場保育士に行ってもらい、該当する写真と共に「〇歳からの草木染」というかたちでまとめ、後述する雑誌にて概要版を発表した。

3 事業の進捗状況

初年度にたちあげた活動組織「伝統染織保育研究会」の研究会のミッションとして、日頃の保育を通して自然との関わり方といった自然保育に必要な課題を見つけ、それらを NPO 法人等の地域との連携で研修機会を定着することにある。今年度も、教育学部総合人間形成課程の必修科目「プロジェクト研究」で立ち上げた「陽だまり里郷プロジェクト」との連携を図り、里山の利活用に関する研修会を開催することができた。さらに、年長児による藍染活動の質的評価手法の検討として、保育士によるエピソード記録および活動写真に基づいた分析を行った。また、発達段階を踏まえた染色活動の有用性を検討するために、乳児から年長児までのクラス T シャツづくりにおける同様の検証を行った。

以上より、当初の計画は遂行しており、それ以上の成果を得ていると判断できる。

4 事業の成果

(1) 保育研修会の実施

本年度の研修会は「園庭」をテーマに講演会を

2 回行った。園庭は日常の保育を展開する身近な自然環境である一方、保育のねらいを意図した人工的な空間でもある。そこで、野育の会事務局長の木村あゆみ氏を講師に、「こどもの育ちを園庭から見つめ直す」と題して公開講座を開催した。池

主催 陽だまり保育園直営改造プロジェクト 共催 宇都宮大学教育学部衣生活環境学研究室・ふるさと未来 Sou

第二回公開講座 (宇都宮大学地域連携・貢献活動支援事業)

子どもの育ちを園庭から見つめ直す

講師：木村あゆみ氏 Ayumi KIMURA

静岡大学大学院教育学研究科(幼児教育)終了後、公立小学校・幼稚園教諭、学教育委員会社会教育課指導主事、私立保育園・高齢者デイサービス職員、保育者養成校専任教員などの経験を生かし、よりよい保育環境の創造を目指して全国を飛び回っている。野育の会(園庭・園外での野育を推進する会)理事・事務局長、公益社団法人こども環境学会理事、著書に『子どもの育ちと環境』(ひたなる書房 2008)、『これからの保育者のために』(南文社 2012)、『保育者を救ぐ』(南文社 2012) など。

日時：2017 7/8(土) 16:30~18:30

対象：幼児の遊び空間づくりに関心がある方

場所：陽だまり保育園 土間ホール

500円(資料代)・20名程度(要申込)

お問合せ・申込み 陽だまり保育園 TEL.028-678-9717 E-mail: info@hidamarichoikuen.org

袋の都市部で自然要素を盛り込んだ園庭づくりを実践されている保育園からの参加もあり、園庭環境に関する有益な情報交換ができた。

図1 公開研修会のフライヤー

さらに、高根沢町の里山整備事業として昨年度立ち上げた「陽だまり里郷プロジェクト」との連携により、「冒険遊び場から広げる地域づくり」と題して里山をこどもの遊び場として活用されている、東京都町田市のせりがや冒険遊び場のプレリーダー岡本恵子氏を講師に迎えて市民カフェを開催した。講演のなかで、「三間(時間、空間、仲間)の喪失に加え、「隙間」「手間」が子ども世界から失われようとしている。これら五間と子どもの発達の意味を噛み締めた遊び場づくりが必要」との提言があった。このことは、日頃の保育をつくっていく上でも意味のある提言であり、裏返せ

ば、このような環境変容のなかで生きている子ども

主催:エコ・ハウスたかねざわ 共催:陽だまり保育園直営改造プロジェクト 後援:宇都宮大学教育学部衣生活環境学研究室

第4回市民カフェ

冒険遊び場から広げる地域づくり

こどもの遊びの創造とその魅力

講師
せりがや冒険遊び場(東京都町田市)
プレリーダー
岡本 恵子氏

Create Adventure Playground with Us!

日時:平成29年7月23日(日) 10:00 - 12:00

場所:エコ・ハウスたかねざわ研修室

参加費:無料(先着50名・要申し込み)

講師プロフィール
NPO法人子ども広場あそびこどもたち理事・事務局長・プレリーダー
1997年「子ども広場をよめるあそびこどもたち」発足時から2004年まで代表を務める。
当日は、小学校での遊び場活動、中学校でのアースベースを約10年間運営すると同時に、1999年から冒険遊び場を開設し、三次元型施設が増え約30ヵ所を15年運営した。2014年9月からせりがや冒険遊び場を運営している。
これまで、東京都家庭教育に関する研究委員会、東京都家庭教育に関する学習資料作成委員会、町田市子どもセンター青少年委員会委員、町田市福祉のまちづくり推進協議会委員、町田市子どもセンターばあさん学芸委員会委員など、こどもの育ち環境づくりに幅広く貢献している。
お申し込み:エコ・ハウスたかねざわ TEL.0286802080 E-mail: ecohouse-ignify.com http://house.eco.coocan.jp

も遊び(教育)保障は、園庭も含めて意図的な大人の働きかけが必要であり、子どもの生きる権利を尊重した空間づくりが必要であるという再確認の研修会となった。

図2 市民カフェのフライヤー

(2) 藍染活動のエピソード記録分析

年長児による藍染活動のエピソード記録分析を含め、乳児からの園全体でのクラスTシャツづくりを紹介したSPINUTS(スピナッツ出版)に掲載された「〇歳からの草木染」は各方面から反響を



いただいた。以下に、藍染活動の一部を抜粋して紹介する。

図3 掲載雑誌の表紙

十年の履歴を次に繋げていく使命を背負った十一代目大空組。卒園式で引き継いだ種を大事に自分達の部屋に飾っていました。ところが、今年度から異年齢クラス編成になり、三つの「おうち」（くぬぎ・やまもも・もみじ）に分かれての生活に・・・どの部屋に藍の種を置く？子ども達にとっては一大事。卒園式で先代大空から種を受け取ったのはくぬぎのHでした。

「いいな～藍の種くぬぎさんの部屋にずっとあって・・・やまももさんだって持ちたいよ！」

「え～もみじさんもだよ！だけど、もらったのHだから我慢しているんだよ」

「でもさ、もらったのはHだけど、前の大空さんはみんなにくれたんでしょ！」

「H ももういいよ。いつもくぬぎさんばかりにあるから・・・」

「じゃあさ、藍まぜ（先代の藍甕の攪拌）おうちに分かれてやっているから、藍まぜするおうちに飾るのはどう？」

「いいね！いいね！そうしよう！」

自己主張をしあって、それぞれの気持ちに共感しながら解決策に至った大空組。その日から藍の種が入った袋がおうちを廻り始めたようです。そして、「これは大空さんの藍の種で、大事なものだから見るだけにしてね」と小さな仲間に注意を促す姿に、年長児としての責任感と藍の活動に対する期待感が現れていますし、異年齢保育の中での藍への憧れが、今まで以上に増幅されるかもしれません。

いよいよ藍の種蒔き。私は「蒔く」という表現がとても好きです。種に時を知らせるという人間の行為を表している漢字であり、生活という営みの中で意識しない限り、植物は応えてくれないという栽培に対する責任感を学べるからです。種蒔

きるとき、私は最初に一粒の藍を子ども達の手のひらに載せます。見つめてもらって、それから糶を剥いてもらいます。「ちっちゃ～い！」「黒色！」

「茶色？」「とんがってる～」など様々な観察結果を表現してくれます。種は大事と言うのは簡単ですが、実際にこの活動をするとうまくしてしまいうちもいます。集中できずにロストする子、指先の不器用さがロストにつながる子・・・原因はさまざまです。落としてしまうと、まず見つけれないことを仲間と体験しながら、一粒の命に向き合うことの意味を認識して欲しいと考えています。そして、二時間以上かけて無事に播種が終わると、

「藍の種は土と太陽と水があれば育つけど、一番大切なのはみんなが藍のお父さん、お母さんになってお世話をしていくことだよ」

「え～、ぼくたち子どもなのにお父さんだって～」「あ母さんになる～！」

このようなやりとりで発芽への期待感を高めます。蒔くことから始まる栽培体験は小学校の生活科でも行いますが、幼児期の「思い」をもって取り組む藍活動は、自分たちの生活の傍らに文化としておくことの意味の方を重視しています。いずれも情緒的な安定や観察による気づきから観る視点を養うということでは共通性が高いですが、栽培や飼育という活動を通して、その対象への気遣いや



共感性を育むことができると考えています。

図4 藍の発芽

藍のお父さん、お母さんになって約一ヶ月。大き

くなった苗を畑に定植する日を迎えます。保育園には十分な畑がないため、地域の団体**と連携しながら子ども達の栽培活動を支援していただいています。畑に着くと、すでに藍が植えられており大きく育っていました。ポット栽培で自分たちの藍の芽が大きくなってきたことに嬉しさを感じていた姿があったので、今よりもっと大きく育つことを認識し、さらに楽しみを募らせながら一つ一つ大切に植えていきました。大人頭でいえば、定植は等間隔でまっすぐに植えたいというもの。しかし、そう簡単な話ではないのです。ここで、大人が予め印をつけたりすれば教育価値は歪められてしまいます。空間認識や数量的概念がまだまだ発達していないので無理はないのです。大人が植えた畝を見ながら植える場所の検討をつけたり、隣の人との間隔を確かめたり、株分けという未知の世界を実践しながらの定植活動は豊かな時間だ



と思いませんか？少々曲がっていても、少しぐらい間隔が異なっても良しとしましょう。

図5 藍の定植作業

そして、梅雨に入って雑草との戦いが始まります。定植から約半月後に畑に行くと、園バ

** 桑窪藍花会（代表：鈴木早苗氏）

栃木県塩谷郡高根沢町の桑窪地区の農地・水・環境保全向上対策事業（農水省）において休耕地に藍を植える活動を始め、地域の婦人中心に結成された任意団体。過去の地域連携事業として支援して誕生した。現在は、干葉藍を年間約30kg生産し、約20kgを染料店に卸して活動資金を確保し、残りを自家製すくもにして染色を楽しまれている。

スの中からも苗が大きくなっていることが分かり、「大きくなって～！」と気持ちが高ぶる子ども達。Tは藍の苗の大きさを自分の手で測ったり、背比べをして「前よりもこんなに大きくなった！」と客観視する様子も見せていました。同時に、苗の周りに雑草がたくさん。指の力、かがむ力を総



動員しての草取りは身体性を育て、栽培者としての責任感を増すことにつながります。自然の恵みを楽しむには労働が必要であることも大切な保育要素だと考えます。

図6 除草作業

梅雨季に二、三度除草を行って梅雨明けの収穫を待つ間、スペシャルな体験をします。益子焼きで有名な益子町に百五十年続く紺屋「日下田藍染工房」があります。毎年、日下田先生を訪ねて本物の藍甕と職人の仕事の風景を記憶に刻みます。藍の匂い、三和土土間に佇む七十二本の藍甕、燻された萱屋根の仕事場、どれもこれも初染を楽しみにしている子ども達にとって新鮮なものに違いあ



りません。

図7 日下田藍染工房（益子町）